新編水滸畫傳

五編

壹

21
875
41

唐本百回本翻譯

高井蘭山翁編譯

葛飾北齋主人畫

新編水滸畫傳

五編 全十冊

浪華書肆 岡田羣玉堂製本

特
遠へ門
875
41

新譯水滸畫傳五編總目録

前帙五卷第四十六回第五十三回ふくむ

卷之四拾壹

病関索大小翠屏山を開く
拚命山火をもつて祝家店を焼
撲天鵰生死の書を雙倶を

卷之四拾二

宋公明一ゝび祝家莊をおち
一丈青單王矮虎を捉
宋公明お祝家莊をおち

明治三十年十月十日購求

後帙五　卷第五十三回より第六十四回にいたる

卷之四拾六

李逵斧をもつて殺人を弾
入雲龍法を剪つて宮廉を被
黒旋風穴を探て柴進を救ふ

卷之四拾七

高太尉大ぶ三路の兵を興し
呼延灼連環馬を擺布し
呉用時遷をして甲を盗しむ
湯隆徐寧を縛して山に上しむ

卷之四拾三

解珍解宝双て獄を越
孫立孫新大に牢を劫し
呉學究連環の計を双用

卷之四拾四

宋公明三たび祝家莊を打
揷翅虎李逵白秀英を打
美髯公張て小衙内を失ふ
李逵殷天錫を打死し

卷之四拾五

柴進宮唐州に失陥し
戴宗智をもつて公孫勝を乞

巻之四拾八

徐寧教て鈎鎌槍を使しむ
宋江大に連環馬を破
三山義を聚て青州を歩

巻之四拾九

衆虎心をほしいまゝに水泊を脅
呉用金鈴吊掛を鎌す
宋江西岳華山を問ふ

巻之五拾

公孫勝芒碭山の魔を降す
晁天王曾頭市に箭に中る

新編水滸畫傳巻之四拾壹

東武　高井蘭山翁　譯編

○病関索大小翠屏山を問ふ

病関索楊雄が妻の潘小姐義弟石秀を恨こゝろ過を悔今更石秀が思ひく面目おゝく。夫ふつゝとも妻の惡さ心魂小微し。今ふも首を刎ゝ〜と思へ共。石秀が云れも理めれば動て心を静め石秀小對し賢弟の計を以て我速に特憤を散ぜん速に如ゝと云ん。石秀が云今此所の城の東門より三里外に翠屏山と云険山あり。長兄明日淫婦を誘て云ふべし。我久〜山神を祭せざるに幸ひ今日暇なれば汝と彼小引て山神を祭べし〜と淫婦を鎌し出し。彼山に上り吹へ来ん先小山に上て待べきる三人對面の上にて虚實を分明小正し其後長兄

心の侵ふ行ひ難し。是別罪を糾し罰を行ふ所なれば。縱ひ官府ふ云ふ
とも。早速其方共べし。楊雄が云三人對面の上虛實を正せとぞいい。
賢者の清潔なることを。我前ふ正さんが爲なり。我今更賢者を疑ふ
心更ふなしと云へども。右も賢者の教に從て。明日淫婦を引て山ふ上る
べきなり。汝ら速ふ來て待ゆへとて。遂に別れて回りぬ。翌日楊雄妻に
向ふ云るハ。我久しく山神を祭せざる間。今日ハ汝と共に山神廟に
參詣せん。空しく用意を調へ來るべし。妻ハ諾て酒肴を
調へ。楊雄刑妻を轎ふ乘せ。蘇州城の東門の外ふ祀る楊雄
廟に轎夫ふ命じて翠屏山ふ擔ぎ行べしといひ。轎夫命を受て
に翠屏山を目で馳行。暫時の間に彼山の麓ふ到る。楊雄先轎
を站て。妻を呼出し。ハ妻則轎を出大に驚て云るハ。夫夫何ぞ

此險山ふ來て。山神を祭ゆ。我先祖の墓の傍
ふ。これあるとなるに。何を必しも遠く此山ふ來りぬ。楊雄が云ひ
山の山神ハ究て靈感あること。汝唯我ふ從て山ふ登れ。轎夫共人ハ暫く
此所ふ立て待べしと。唯一人の下男を引て。三人齊しく山坂
を上りし。此に石秀ハ此所ふ立て待ゐる。楊雄夫婦が來りしを
見て。急に迎ふ。楊雄が妻ハ驚き怪る。石秀潘巧雲ふ向ひ嫂ふ
恙なきや。巧雲答て叔ふ何ぞ此所ふ來り。石秀が云我疾來て嫂ふ
を待ゐぬ。楊雄又妻ふ對して云。汝前日我に告るハ。石秀一向不義
の淫戲を云しとなり。今日此所ふ來ハ他人もなくされば。汝共人られを
對決して明白ふ正べし。巧雲が云通りしと。互ふ問ひて何の
益ありや。石秀眼を怒し云るハ。嫂ふ汝何ぞ長兄ふ

苦て。兄弟の義を壞ハしむるや。今日長兄の為ゝし明白ふ云ゆへ。巧雲云
ゞ云。汝ふ過ちちゝくハ自ゝ靜り玉へ。妾ゝに眼を怒しむるハ。兄何の妄れ
ぞや。石秀が云汝ハ粧人初ゝぬとこそ思ふべゝれ。我今伝見て出しく
汝が罪を正さんとて。斬て裴如海が衣裳を剥出し。汝兄を識徳らゆ
巧雲云れを見て。兄へば面を紅めて一言の答ふも及ざりゝ石秀腰
刀を拔て楊雄ふ与へて云ゝハ兄ゝ此事を分明に知ゆゝんとゝらバ
武了郎ふ問ゆへ。彼ゝハ忽ち明白て知れいゝん。楊雄独りとはゞ刎ち
了郎を撃へ。大ふ怒て云。汝婦人いうんぞ我妻を助けて。不義をなさし
めるや。一ゝ詳に白状ゞば。我肯て汝が命を饒ぶべし。若ゝ黙ふても
詐らバ。先汝が郎を刎べきを。彼了郎ゝれを聞て大ふ驚き忽ち拝ひ
懍さ云ゝハ。彼ゝハ相公我命を饒しゆへ我詳にこれを告んとて。

彼日潘公が家に法事ゝし時。裴如海姑て私情を通じ。以ゝより
毎度忍び入て擅に樂むと。姑終具に語りしゝば。楊雄大に憤ゝ
早速妻を諭例して罵ゝ曰ハ。汝淫婦自ゝ明に白状せよ。彼了郎
已に白状せゝ上ハ汝縱ひ抵賴ゝも抵ゝ難ぜ。若實情を以て我ふ告ハ
我肯て汝が性命を助んゝ。ゝ句ゆゝも詐ゝへ。只今汝が胸を刮開
て。天罰を知ゝめん。巧雲大ふ驚き。則却を震ハゝ云ゝハ。我前日
不ふ酒與ふ来ゝ自ゝ誤ぬ。彼ゝハ舊日の恩を忘ゝ。
這回の罪を饒ゝ。石秀が云長兄必ず事を分明に正しゆ。
自ゝ誤てこれを思ひ。ゆゝとゝれとて。又巧雲に向て云。汝裴如海ふ
奸通ゝ。夫の眼を眩して。我疾ゝ見を知ゝり。彼ゝに汝言を詐ゝ
長兄を謝さ。我と長兄との盟誓まで。彼らんとする由ゝ前夜我汝が

病關索
翠屏山の
淫婦を
斬る図

家の後門ふネて待とちゝび。本魚を持し扨陀後門ゟ出らるを捉へ。
これを責て汝ガ悪事をゐ次第。内外相圖の事を。微細ふ物ゝ礼し。
氏頭陀ゟ衣類を剥ム首を刎ム本魚を奪て我見を敲き相罵をなせ。
裴如海ゟ汝ガ床を出ゟを捕へ衣類を剥て首を刎。其衣類ハ証見
の為ゝ如海ゟ刎今汝に見する処と云ゟせるに。楊雄又大ふ罵て云。汝
淫婦ゟ始終の悪事倩細ふ洩れ。弟ゟ絶ゝぞんハ我を殺に汝を害ゝべきぞ。
巧雲今ハ止ことを得ず。遂ふ白状して云。日外老父ゟ家ふ於て。丈夫の
法事を成し時。始て裴如海と奸通し。其後毎夜後門ゟ爬戻ゟ
しと偽りゐる。石秀又問て云。嫂くハ何ゟ。我汝に調戯ると偽て。老兄
ゟ若ゐを。巧雲ゟ弟秀丈夫酒ふ醉て。我を責りゐひし時。何とゟゝん
蹺蹊ありげに見へゐゐゟ。我ハこれを精して出ひるハ。叔ゝ必定我

過ちゐることを知て丈夫に告ゟひしに。丈夫是を憤りゟゝんと推察し。
却て叔ゝを誹て丈夫を訓ね。叔ゝ何ぞ我ふ調戯れゐんや。何事も
却て我詐りしことをゐ。彩くハ慈仁を欺て始を
弁し。ゟ人。石秀又いまく嫂ゝ汝ガ石秀が所ゟ出ひ。せうと思ふべ
ゐれを若兄我と義を結ぶゐれバいう程の事ゟ。我ガ手ゐ所ふ。
潘公の親志ふ免じ見ぬ。ゟりふ立べし。然に汝ガ不義今ふ露ん。事時い
必然老兄を毒殺せんと。大罪を企つべし。豪傑大丈夫ゟる者淫婦の計
ふ命を落さば我義兄ハ天下英雄の笑者とゐゝん。義ゟゝて何ぞ見
ゟに恐ん。是亦我が止ことを得ざる今日の天理ゝ。汝よく胸の理を分別
して見よ。又楊雄ふ對して云るハ。今日對決の上ゟて我不義なを明
白に正しゐれば老兄いよゝく我ゟを知ゟ。且氏女ハい程ゟも老兄の心張ゟ

行ひ申し揚雄がいもく賢弟我為ふ彼が衣裳を剥ぎ申し我自らこれを
行ん。石秀云ふ兄弟の義を思ひ遂に妻と了翫が衣裳を剥れば揚雄親自女人の
女を樹の上に捆り著せ切刀を揮て云るへ。これらの淫婦の今これを
殺さば久竟人を傷ふべし。只冥冥に我を欺て殺さんとせ。先一刀に
了翫を斬殺し次に淫婦を斬んとせしれに淫婦大に流涕して云るハ。
丈夫武殺ハ我一命を殺し申し白後為ちを改むべし。揚雄冷笑て罵り
るは汝淫婦茶飯ハ多くも我を欺さ。我已に汝が言を信じ難乎兄弟
の情を壊うと欲しぬ我今汝を害せずんばいづくんぞ能我武情を
散ぜんやとて遂に刀を挙て淫婦が頭を刎ふる。揚雄又石秀に對し
云るハ武上ハ汝と共に何方ふ為り生計て。身心を安ぜん為汝行べき
和めべ遂に誘引ぜんや石秀が云我出兄と共に人を殺せしとなれば

等閑の不ふ行が如し。唯冥冥に梁山泊へ投行べし。揚雄が云彼所ハ豪
傑多しとの人なり。本極機多紀所なるに。いかんぞ安りに行んや。石秀が云
梁山泊の晁宋両頭ハ原来人の危きを救ふ。いかんや今我等賢
を招き士を納む。遍く天下の人これを知れり。我輩為ふ彼地に投行バ。
久竟事を保て身命を安ずべし。揚雄が云凡事ハ先に難ふ。
後に易紀時ハ後患を免ると云るに賢弟猶冥冥に三思を加へて。
前後の難易を量るべし。兄我等武糧束て梁山泊に上らん恐くハ
法頭が定国より来れる私訪ふ。人ハ疑ふとも疑ふ人ハ全く賢弟
の機ふ服しがたし。石秀笑て云宋公明ハ押司の職をなすこと
人これ皆知て能人を識べきに何の疑ふ人を疑んや。附て我山陣に
頼る極機あり。彼日出兄我と兄弟の義を結ぶんとて。酒店に弱来り

ゆひ一時我とうに酒を酌でありし女人の旅客。一人い刈ち梁山泊の豪傑神行太保戴宗と云し者。一人い梁山泊ふのんとて戴宗に日行せ一錦豹子楊林と云者。彼其時素が志を感じ一旋十女の銀を惠て云るい梁山泊ふ今ゆく。賢士を求め士を募る必代紙を乗て山陣ふ来れと弥めゐ代故ふ我今梁山泊ふ行んと欲ふこ楊雄が云汝已ふ代の如き来厝めゝ何ゆゑ疾云ざりしで宜しゝ行ゝ地行ゝと。各腰刀を帶し。朴刀を提げ已に山をくんとせ紙に。松の樹の背後より一人の漢子呼て云るい汝女人今人を殺すのゝ事ゝ剣へ梁山泊ふ行んとい。あゞ大猪の金之。楊雄石秀これを聞て忙しく背後の方を顧るに。彼漢子地上ふ拜伏せ代人い刈ち姓い時名い遷と号し又諱名を鼓上蚤又蚤ふ化と云ゆ言唐州の民。久しく蘄州ふ流落楊雄が厚恩を多蒙りし者之。幼より簷を飛壁を走。鼠を跳ること迅速人目を惑ゆ術を練熟せり。代時楊雄問て云。時遷汝い何の戯云と云や。時遷ゞ云素頃日貧苦ふ逼りし。代山中ふ墓ある紙を行〇て。棺材を掘出し。刈ち其内を搜し。銀器の類を見んと欲し。毎日這辺に徘徊せ先ゆも已に夫人を殺しゆゑ見れを。故云知ぬ紙ふ拔て出さりしゞ今爵級の商賊して云ゆひ。しゆ呼ぶに梁山泊ふ行ゆんとのこと。りし。ゆゑ素敬て地出以彩い某を携引しゆで恩ハ天地と同じゝん。石秀ゞ云汝已に我嘗ふ従て為ゝんと思で。我肯て汝を携へ往ん。今梁山泊ふ壮士を招く時帝るれで却て人多く行を拔ふべし。時遷是ゞ大ふ感謝して云るい素ゆ山陣ふ至を図め。必定今日の貧苦を免るゝ。として。遂ふ三人後山の小路より直に梁山泊を重で進行

う。扨女人の轎夫は山の腰ふまて數刻續しへ。紅日已ふ西山ふ傾け
ん。揚雄ホ二人尚未ど山とりしび。轎夫を商議して云るハ今日も晩
んとするに未ど用ゝ。三人相ゝ謀に墓ひぬるとりやめんとて。女人の
轎夫齊く。山上に登て武辺と見るに。女人の女斬殺されてありしを。轎夫
大ふ驚き。慌て忙き驅回て。潘公に報ずと。若刻を換潘公と共ふ蘇州府
に至て。知府相公に拜へし。知府者に人を驅て。屍首を檢驗せるに。
生人殺て色回り。知府ふ就じて云るハ。女人の女松の樹ふ絆り著て殺
されるか。殘に出家の衣裳のみ。別に一顆の物をこれなしと。未ど殺り
も罪ゝ。知府ふ。前日悲衣如海が殺されることを思ひ出し。是則
私情を通じ。已が夫ふ殺されを者疑ひなしと。潘公と共ふ出し云るハ。
汝ゝ女兒を殺ゝる者ハ。汝が壻たるべし。先比揚雄が隣家を弥出し

出家ホ女人首を刎られ。各衣裳をうしなと云に。今女人を殺しる
刎に。出家の衣裳を換ずと思ひ合ずれば。各私情を通じるを疑
なるべし。揚雄と石秀とを捉へされば。次第しうとして。翌日賞議とな
て揚雄石秀女人を求めり。扨揚雄石秀時遷ハ已に蘇州を離て
去しゝ。不日に鄆州の地ふ至て。香林注とるうし知て。ゝ一つの高山
を尋ゝ天色漸く晩しゝ。三人の者遂に旅宿を求め欲的を探し
る刎に石秀ホ居所を搜げ居の内を窺ひ。窓の上ふ十條挺の力掛
てあるゝ。石秀別家僕と呼んで問るハ。汝が主人ハ何等の人なるぞ。
家僕答て我主人を祝朔奉と申人ゝ若面ふ黄髭ふ。高山ハ獨龍山と
号て。山茶ふ就くゝる一つの居めり。別我が主人祝朔奉の住宅ゝ。祝朔奉
三人の男子あり。刎て是豪傑なる由。人皆称して祝氏の三傑と云。

氏郷ハ合六七百の人家あり。尽く皆農夫なりといへども。毎家二挺の刀を所持す。我氏店を祝家店と名付て。常に十に人の家僕来て宿まるに因。列ち十挺の刀あり。氏刀ハ云に及ばず。村中の刀剣と我主人より分与り。石秀ら云汝ら主人ハ又何の加村中に刀を分ちなるや家僕云氏郷より梁山泊へハ遠つゝ。只氏郷を防んが為。多くの軍器を備へて家くゝ求めり。石秀ら云我價を償て一挺の刀を所望せん。汝須らく我ハ賣なるべし。家僕ら云軍器の類ハ。悉て目録の上ハ記しる処なれば。素何で有りにられを賣んや。為主人見を知ハ我を策べし。主て軍器の法を〻のよる。石秀が云汝賣ずハ我も買まゝいんで彩るやと。自〻盃を執て家僕ハ勧められハ家僕ハ見を辞し。終ハ座を立て出ずる

○拝命三次をもつて祝家店を焼　又捨命三

氏時揚雄石秀ハ盃を巡らし樂居るが。時遷が云去来兄弟鶏を列ひ白ゞ。素見を求まるべし。揚雄が云我兄に家僕ハ問られ。氏郷ハ鶏を賣者なりと云しに。汝何れの処に去てこれを求るや時遷が云某自〻求るあり。歩笑て出るゝ果して一つの鶏を偸まりしゝ揚雄石秀を完示として云るハ汝宜て械を出しこれを求めつゝんとこゝ。彩て鶏を殺ー三人齊しく用る処に。家僕見を知再び座上ハ出て云るハ。其鶏ハ我家に養ひ来る鶏なるに。いんでこれを偸まるや。時遷が云氏鶏ハ今日途中に於て買求る之。汝何で車ハのことを云や。家僕大ハ怒て云。汝ハ何者なれば人の眼を遮て偸とるや。ふく原の鶏を還せ石秀ら云氏鶏已に殺せり。豈能ハ原の鶏を還さんや。我汝に價を還すべられば

怒りて休よ。如僕が云彼鶏は毎朝曉を報る鶏なれば。店中ふられて缺こと
なし。償は十兩銀を償ふとも。我これを失ふ。只好系の鶏を還せ。石秀大
ふ怒て云。我償を償んと欲し。汝再三系の鶏を還せと云はゞ。ぐだ〳〵して道
理なし。我が上は一錢も償ふまじきなり。汝必竟これをいうんぐせんや。家僕が云
汝ら忍で我店を等閑の客店と一刻ふ見ることなれ。某が鶏を還さずんば。
汝ふ三人を捉へ。梁山泊の賊と名けふ。石秀益怒て
我が梁山泊の豪傑なれば。汝いよ〳〵敢て我を捉んや。楊雄も同く怒
て云。我好系を買て償を償んと欲せるに。汝いんで我家を捉んや。家僕
見て時して大ふ怒り。忽ち刀を揚て賊めと〳〵打たりければ七八人
の漢子跳出て。走ちに三人の者を捉んで奔てうせ。石秀られて奔
雷のごとく吼ふく拳を拳て三四人を倒しられば。楊雄も同じく數人
場倒ける紛に。彼家僕られて走に逃んとするを。時遷が〻ごとくに走り。
眉間を打られば忽ち血を吐て倒れり。彼ふ打倒されし漢子を扶起て
後門より逃出れば。楊雄られを見て云るは。彼ふ已に逃出し上は。打剣大
勢を引て来らん。我家迷ふ。紛を避ばんとそ。三人は〻しく陸の上に
掛る力を奪ひ。走て。已ふ跑出んとせし。紛に石秀が云るは。事已に紛に
迫れり。何ぞ吾人をなさんやとて。遂ふ家の屋に火を放しうへ。忽ち黒煙
天ふ冲。煙塵に焚起て。三人の者ども大驚ふ出て。約莫一時ばかり馳
る処ふ。茅後ふ火把の火二三百起て喊を叫んで赶来る。石秀が云我家ふ
後を求めて逃ばゞ可なりんや。楊雄が云先ず紛に拒て。彼ふを暫く赶散し
曉ぬ。ふ後より馳ばゞ〳〵と来ぐ云も罷〻ざるに。石秀左右を圍んぐ。近くと
赶来りしぐ。楊雄ふ三人一齊ふ力を揮て斬て出。楊雄まゞ七八人を斬

楊雄石秀時遷等
大小祝家店を劫を図

仗し処に。石秀も又十餘人斬殺しられば。数百の人数先を爭ひて。方八面ゑ逃散る。楊雄ゑ三人又数十歩ばかり行るゑ。再び喊の聲大ひゐ起り。宮源き処き。二つの鈎索を投出し。先時遷を搭往て引行しゑ。石秀ゑふられを救んとせし処に。背後より又二つの鈎索を投て。石秀を搭往んとるを。楊雄ゑふ力を拳て。索を放拂ひ。身の内にをゝへて。時迯を救んとせしゝども。遂にそれ方を知ざりしゑば。楊雄ゑ云時迯を活捉れて堪憾るは思へな。今更力の及ぶ所ゑ。先迷に道を求めて蔵れべしと。遂に東の林を原んで逃去る。扨々民ゑい時遷を活捕て祝胡奉が家に引渡しぬ。楊雄石秀夫人を。已に二時ばかり詰られば。天色漸白るを。石秀ゑ面を見て。一杯の酒を飲しゑ。夫人ゑに酒騰にへて歌る処に。又一人の大漢子ゑ来へて呼び云るゑ。大夫人今汝ゑに工役を作せんとるゝ。早く大夫人の飯ゑ来べし。酒店の主牡丹く義人少刻到しんと云るれば。彼大漢子ゑ門外ゑ出んとして楊雄が来るを時。楊雄ゑ漢子を見るに。原来織荊るゑ。列ち呼て云ゑ郎汝ゑ何ゑ楊雄を忘れぬる。彼漢子ゑに跪を面し。楊雄を見て俄ゑ驚て云るゑ。恩人ゑ処ゑふ。楊雄ゑ云我ゑ知ゑ呼び云るゑ。恩人ゑ故ゑ。先共ゑ坐して須臾せよ。我伴にこれを告んとして遂に三人坐を引ねて隅ゑ行くゑ。時ゑ石秀問て云ゑ。人ゑ誰ゑるぞ。楊雄答て云ゑ人姓ゑ杜。名ゑ興原中山府の生ゑ。人皆ゑ鬼臉兒と諢名せり。昔年蘇州ゑ於て人を殺す故入牢して。已に斬罪ゑ決しられを。我深く彼が武藝を惜く。上下の役人ゑに周遍し。遂に斬罪を免れしめるが。豈知ゑ今日ゑ知て對面せんとゝ。杜興

問て云長兄は何ぞの公用あて。此辺ぞ通ひしぞ。楊雄低云ていらく。我
横州うて人命を害せ。田虎梁山泊へ行んと欲し。昨夜祝家荘ぞ
る紙に。又事を惹出し。今民ぞを殺しるが。只我等三人の肉時遷云
その活捉れぬ。杜興が云長兄ぞ安んじ申。我自分時迫を放つて
出兄ぞ還すべし。楊雄大ぞ怒て云。已に捕らば先警〻く酒を汲申べと。
杜て盃を執て勧めり。杜興又云系横州を出てより。数年此処
逗留し。幸ひ一人の大友人ぞ逢せられ。乃ち彼大友人の肉のこと。知て
系が飲ぎと云とな。此方は故ぞ問る迫めしば。楊雄が云事大友人
とは。雅人なるぞ。杜興が云此獨龍岡の系に三つの村あり。中の村を祝家
荘と云。西の村を扈家荘と云。東の村を李家荘と云。此三ヶ村の内ぞ
総て一二万の軍馬あり。その間ぞ於ても。祝家荘へ別して豪傑多し。

此村の頭る祝朔奉三人の男子あり。これを祝氏の三傑と云。嫡男が
名は祝龍二男は祝虎。三男が名は祝彪と号す。又一人武芸の師あり。
その名を鉄棒樂欒廷玉と号し。万夫不当の勇士。年齢又一二十の
力士あり。西の村扈家荘の頭る人。扈太公とて。一人の男子名を飛
天虎扈成と号し。武勇強人ぞ揚れ。又太公の女子が名を一丈青
扈三娘と号し。雄武力を使ひ。あらゆる上の働き男子に揚れり。東の
村李家荘の頭る人は則ち系が主人にて。姓は李。名は応と号す。最雄
強を使ひ又岩背に飛力を蔵し。百歩の内を隔て人の首を射る。此
三村は互に盟を拵ひ。某事ある時は。各人数を強て相救ふ。只梁山泊
の豪傑者て云糧を借んとを恐れ。三村は〻〻人を彼へ遣ぎ物て
厳密ぞ。系今長兄を引て李大友人ぞ対面めし。則ち李大友人

の書翰を祝朔奉が方に送り。時遷を求めば。祝朔奉肯て時遷を放
遣すべし。楊雄が云李大友人と云い。彼撲天鵰李應と云人まいあしば
や。杜興が云朔其撲天鵰がごとく。石秀が云獨龍岡の辺に撲天鵰李
應と云豪傑あるといひしゝうども未だ曾て実を知ざりしが果して
詐りなりしゝ。我等迷ふ弛て對面せば可ならんとて。遂に杜興に
随ひ酒店を出て三人同じく李家莊ふ到りぬ

○撲天鵰生死の書を雙修に

此時杜興先家に帰り李應に形を告げ門外ふ出揚雄石秀を莊内ふ誘
引し来る和に。李應自ら廳前に出て迎へ。後に一礼早りしが。彩て酒宴
を設け友人を欵待る。此時友人再拜して云るは。我等大友人一封
の書翰を祝家莊に送りて。時遷を救ひなんとす。我等身を潜るまで

此恩を忘るまじ。李應これを聞て哀ふ思ひ。早速書翰を修へ使を祝家
莊に馳れば。楊雄石秀浄く見を感謝せ。李應が云友人の豪傑心
を安んじ曰。我が出馬を待ちうけ。少刻時迫て遂ふ来るべし。強
て酒を勧めとして。自ら盃を把て和勧め。雨後早て後李應又徐梅
のことを友人ふ問る。友人の若一くこれを語りしが。李應手を拍
て笑て大ふ喜び。益熱志ふ見へ。扨かの使者已の下刻ふ弛用り
則李應ふ對して云るは。柔自祝朔奉ふまゝして書翰を送せ
和ふ。祝朔奉ハ已に時遷を放つべさ氣及驚れを彼三傑郊て六
ふ要り。急に時遷を友刃に引渡もべしとて。返翰ふも及ざるし加せひく
帰れりと。李應これを聞て勿ち大ふ騒て云我此三ヶ村の内ハ互に生死
の交を結て。急に睦しゝれば。書翰を送るべさふ。

卿と三傑が怒とおせーハ必定汝が云張りわるべしと。又杜興ハ命じ云
るハ汝自ら独て祝朔をホまゝ。冥〻く倣細ハ苦時遷と元清明
べし。杜興が云ハく大友人再び書翰を携へて李逵ハ必ず兼充
すること。李逵を云ハ同し。杜興ハ与へられば。杜興
初ハ怒ハ李逵ハ再び楊雄石秀ハ
對して云ハ。武田の書翰こゝいよ〻具に云遣られば必統好伝あるべし。
心を寛げ休めゝ。共に黄昏まで休しゝ。杜興ハ酒を飛せ酒あり。
彩〻大に変じて暫く勢を出して一統する礼。李逵問て云汝何の思
かく怒るや先怒を息て彼等が起義を吟ず。杜興が云来書簡を携
て荘内ハ入し。祝龍祝虎祝彪兄弟三人ハ〻く出て大ハ怒り
汝又来て何をうゝやと問し。杜興ハ主人より書翰を

奪ひとて。刎これを見るに彼ハ又怒を発ず。罵り云ハ汝が主人終
いんぞかく悪うして再三書翰を来ありに梁山泊の絨時遷を求るや。
我今これを支配に引渡さんと欲に。汝再び来ること勿れと云し。
来又答て云ハ。時遷ハ梁山泊の者ハ。彼ハ武田蘇州より来り
旅客と。然くハ仁心を畜ひて。彼が一命を殺し史といまだ云も決
ざるに兄弟怒ちぶて云ハ。我改〻て時遷を還さ〻く。書翰を扯
破て地上に擲棄。尚怒りに罵て汝より再三繰ハ兄弟が怒りを惹
さば我必ず李逵を捉へ共に友司へ引せんと思に〻ハ。来を
怒りれば。三人の兄弟郭人ハ命じ来を捉んとせし。来答ハ
築て独回りの〻李逵を呼て怒ち牙を咬歯を切て大ハ怒り。
るを引せよ我自己に独向んと吟りれで。一家中騒て騒動しハ

如に楊雄石秀徐て云。大皮人怒りて悪事人必ず我等が為に結盟の義を懐ひ来ふと云ん。李逵怒りいきく呈て毛頭これを憂へ給ふ。遂に金多盔甲を云〜云に鎖鎗を拵てるにお安凡そ二十餘人を引てお出られべ。扨與楊雄石秀ホも門くお續て馳出る。李逵已に祝家莊ホ到りしに。紅日も西山に傾ぬ。此祝朝奉が家は門前に二つの弔橋あて江方へ抜て宮墻めり。樓の上に金鼓を張け。樓の下に劍戟を連ね防ぎ禦る。李逵先に立て大音聲に呼り云るハ。祝家の三兄弟いうんで我を誘ふや。速に出て拷負を受せよ。此時大門開け〜如に。天六十餘一度に発出る。祝朝奉ハ赤ら糸の鬚先立られば。第三の子祝彪お續てるを一番に躍出て李逵を見て。先祝彪を指ざして大ホ罵て云汝黄ニの孺子何ぞ来りて我を欺くや。我と汝が親とハ死生の交りを結び。撞て心を隔らし志を共に〜互にお助けて村を去る。然汝が家に何事も為ず。我ホ問て人を求る時ハ別人に出し〜拘を乞ハ別ち拘を送る。我今一個の年人を求んが為已に久敷まで書簡を寄るに。汝これを拉破て。我名を恥辱るハ。これ何の乃理ぞや。祝彪が云我が家汝と。死生の交りを結びし〜根えハ梁山泊の緘を授へて山陣を掃清んが為ぞや。汝ハ梁山泊ホ忍を通じて。已に係級の企めり。此故ホ我汝が書簡を拉破りぬ。李逵が云汝年人を授へて。梁山泊の緘とするハ大ひなる非道ぞ。祝彪が云時遷已に白状〜るに。汝尚抵賴とするや。速ハ速に退け。然〜ぞんば必ず汝が一家を捕へて。街に示戒べ。李逵是を聞て大ホ怒り。袷を撥りるを躍せ。掛かれば。祝彪も

李應箭疵を負て治療を乞図

又るを飛せ擒と搦〻捌ておき将已に鎗を交へて。十七八合
闘ひしかば。祝彪力衰へ敗するを紙ば。急に二十歩許引退ひて。
弓箭を捨て打揺へ恰も満月のごとく搜るくゆうと敗ちられぬ矢
勿ち李忠が右の臂に中りて。るよう下に走側に落ちゐる。祝彪是
を見て。再ひ槍を挙ゆく捌へし。楊雄石秀齊しく力を
揮て砍て出。遂に祝彪を乎で左右より来りしかば。祝彪又るを思し
走り行。楊雄石秀も追来てるの股を砍るふ勿ち倒て生し
かば。祝彪もそれに落んとせし。紙に大勢馳来てこれを扶け法人一度
ふ敗つ矢ハ只面の際ごとく。楊雄石秀ハ身ふ盛甲を着せざし
ば。武策を遮りごとく思ひ。遂に祝彪を棄退きり。武時杜興ハ李
忠を扶け再びるふ来られば楊雄石秀ハ左右ふ従ひ。且李家荘へ

と退きしに祝彪が勢ハ二三里ばかり追蒐しかも。天既已に晩て暗
くなり四方。遂に人数を引纏て本途より回りり。扨李忠ハ已に私宅に
回りて策疵を養生し。別又楊雄石秀を後堂に待て計を商議
るに。楊雄石秀が云。大友人已に矢ふ中りなひて。時運も又救ひ
難ければ。我等友人は先梁山泊に上り。晁宋両頭領と彩んで。大友
人の為ふ武仇を報ぶし。李忠が云。我今祝家を打破て。時運と救
んとハ思へども。我已に矢疵を蒙るのみならず。彼が勢ハ我勢に多られば。
頗る難さ而あり。武上は先梁山泊に上りゆひて。宜しく計を謀しも
て。一盤の金銀を扨ゆる。楊雄石秀これを辞しられを李忠再三云
を尽して送りしかば。友人の者遂ふ金銀を收めて。李忠ふ謝し別れ。
直ちに梁山泊を尋ね急しかば。ようや糸面に新しき仮屋あるを看て。友

人齊しく酒店の内ふかく入り。暫く酒を求て飲るに。武酒店は列ち梁山泊
より新に建る酒店にて。石勇これを嘗るに世間の風流を探聽
做眼の処へ。武時あ人の志酒店の小廝ふかく。梁山泊の強盜を聞ひ
るれば。石勇傍らに。これを嘆て起ち。武あ人の若い尊者の族ふかしと。我
自ら是を試んとて列出て問るに。実客あ所は何れより来りぬひしぞ。又
梁山泊の名を問て何の用事あるや。楊雄が云我等は蘇州より来れり。
山陣に赴る用事あるなり。石勇忽ち戴宗が偽りしを怒ひ列ち
問て云るに。是下に石秀と云人あるべし。楊雄が云来は楊雄と云
者なり。石秀は武兄弟 兄と云てもれば弟が云へ 列石秀を指ざす。又問て云
るに是下何を以て石秀が名を知りぬるや。石勇が云。柔が云へるに
は。日前戴宗蘇州より帰て。大名を称揚せり。よりて柔が云の志

名を聞及へり。今日山陣を弱ぬふ大ひなる者ありとて。彩て酒宴を設け
態吟に歓待列ち水亭の密を開て。お客の雪笠を。葦の内へ射入しぶ。
ふ速一艘の快船を漕来りぬ石勇自ら人を待て船ふ乗しめ。歩して
鴨嘴灘ふ出て。岸ふ上り。石勇先一人を誘て。山陣に彩と告られば戴宗
楊林ふ山を下り。お迎へ遂ふ引て山陣に上りし処に。法師外ハ皆聚義
廳ふ招張て待居り

新編水滸画傳巻之二拾壹畢